

岩手県大槌町 医師会災害医療チーム(JMAT)に参加して

Vol.5



(第6次派遣隊)

活動期間：平成23年5月20～24日

支援場所：岩手県大槌町 岩手県立大槌高校救護所

参加メンバー：

中嶋 優太 薬剤師 (株式会社町田アンド町田商会 サカエ薬局弥生)

本内 孝典 薬剤師 (株式会社アグリシティ テルス調剤薬局北上)

八木橋 郁夫 総務担当 (株式会社町田アンド町田商会 農事営業部主任)

避難所の状況

弊社、株式会社町田アンド町田商会薬剤師が医師会災害医療チーム（JMAT）の活動に5月3日から継続して参加しているが、その当時から避難所の状況に大きな変化はない。

避難者数は250名弱でほぼ横ばいである。

依然として体育館での生活を強いられているが、高さ2mほどのパーテーションやカーテンにより各世帯で区切られ、ある程度のプライバシーは確保されている。

今までは居住スペースとなる体育館の責任者として自治会長1名をおいていたが、一人だと業務がなかなか円滑に回らない、負担と責任が重すぎるとのことで、8班に分けて班長を決め、班長8名による合議制に変更となった。

食事は朝昼夕1日3回で、質、量ともに十分と思われる。「自分たちの食事は自分たちで作りたい」との希望から、調理師資格者が中心となり、各班の当番制で調理している。調理は高校の調理実習室を利用し、食材は自衛隊が運んでくるものや救援物資によるものを使用している。ボランティアによる炊き出しもあるようだ。



大槌町内にコンビニが立ち上がり、近隣地区の商店も営業を再開しているようだが、生活資金や移動手段がない避難者にとっては、生活物資を十分に入手することが出来ず、まだまだ不便な生活を強いられていることに変わりない。また、避難所では、限られた救援物資を平等に配給しようと努力されているが、先の見えない不安から必要以上の物資をもら

おうとする避難者が多く、秩序ある配給に関しては未だ問題が残っているようだ。

トイレは校内の水洗便所を使用し、掃除は各班での当番制である。

入浴施設は避難所近くに自衛隊が設営した風呂があり、夜9時まで受付けている。

目立った争い事はなく、避難者同士の挨拶も盛んで、皆で協力して和気あいあいと前向きに生活しようと頑張っている印象を受けた。



救護所内でのボランティアスタッフ

青森県 JMAT は医師、看護師、医療事務、弊社薬剤師、総務担当で構成されている。医師側はカルテ作成、問診、診察、処方、救護所外処方箋の発行を行い、薬剤師は、調剤投薬業務、処方設計支援、救護所内の薬品管理などを行い分業体制となっている。

その他、薬剤師業務としてセルフメディケーションの推進、医療体制の構築、公衆衛生の改善に向けた取り組みも行った。救護所は高校の保健室に設けられており、診療時間は9時から11時半、13時から16時までで、診療終了後は救急の対応もしている。毎日17時から釜石市で開催される災害対策本部カンファレンスに医師、薬剤師が参加した。

宿泊は、校内の特別教室を1室借り、チームは寝食を共にした。

この他、愛知県保健師チームは計6人で構成され、大槌高校避難所を拠点に、近隣の避難所をまわり、避難者の健康状態確認、血圧測定、病院への受診勧奨などの支援を行っている。保健師チームは遠野市から毎日通っていた。



避難所の代表者は2名。町役場職員のOBの方方で、今回の震災で臨時に採用され、避難者の生活を守るために日々奮闘されている。以上のメンバーで8時40分より診療前カンファレンスを行い、避難所の状況、問題点など申し送り事項の確認が行われる。

今回は避難所でのインフルエンザ拡大防止に向けた取り組み、公衆衛生の向上、医療チーム撤退後の医療体制の構築などに関して皆で協力して取り組んだ。

インフルエンザ対応

今回の活動期間中、釜石市の開業医より電話があり、大槌高校避難所で生活している医療事務員がインフルエンザ陽性であることが判明。その家族も同じ避難所で生活しているため、薬剤の予防的服用、隔離を含めた対応の依頼があった。

早速、当医療チーム、避難所代表、保健師で隔離環境を設営した。隔離施設は現在保健室として使用している部屋を使用。インフルエンザ発症者の家族も含

め3名が隔離されることとなり、トイレ使用以外は常時隔離として対応した。避難所班長さんから、隔離室への食事の配膳について相談があり、昼夜常駐する我々医療チームスタッフで配膳してはどうかと医師に提案し、了承を得た。配膳時に、インフルエンザ患者の容態も確認することとした。隔離初日、避難所代表が隔離室と避難所体育館を頻回に行き来していることが判明。感染拡大防止の取り組みを説明し、隔離室への用事は、原則、医療チームスタッフが対応することを提案した。これを機に、毎日多くの避難者と接触する保健師チームの動向も懸念され、隔離室の対応は限定した方、必要最低限にするように説明した。また、避難所巡回の際は、避難者に風邪様症状が疑われる場合は早期受診を勧めること、普段からマスクの着用、うがい手洗い、消毒の励行することを話していただくよう提案した。以上の対応措置を災害対策本部に報告したところ、感染拡大した場合は県立中部病院のICT（感染制御チーム）で対応するとの返答をいただいた。その他、抗インフルエンザ薬の在庫の確認、インフルエンザ患者濃厚接触者に対する予防服用の準備、投薬説明を行った。その後、患者容態は改善。解熱後48時間経過を確認し、隔離室から避難所に戻った。医師、看護師、保健師、避難所の代表とともに感染拡大防止と終息に努めた。

地域医療機関との情報交換の重要性

釜石災害対策本部カンファレンスでは、各避難所で活動している医師より、インフルエンザや感染性胃腸炎など感染症発生の状況報告が毎日行われている。しかし、再開した保険診療所を受診した感染症患者までは把握されていないようだ。災害医療チームと保険診療所では、感染症に関して情報交換の場がないことが一因であるように思われた。災害対策カンファレンスの開始時刻は17時であり、保険診療所はまだ午後の診療が終了しておらず、参加が困難な状況だ。避難所の患者も診療所に通い始めているため、災害対策カンファレンス時に、診療所の情報を共有することも大変重要であると思われた。大槌高校周辺の診療所4カ所をまわり、前日のカンファレンスの情報を提供し、状況確認を行った。ある診療所ではインフルエンザ陽性患者が5名いたとの情報を得、当日のカンファレンスで報告した。学校も授業を開始し、職場など集団で過ごす事が多くなってきた今、医療現場と対策本部の情報共有が必要であると実感した。

感染症防止に向けた薬剤師の取り組み

当該カンファレンスで一緒になった薬剤師より、大槌町内小学校避難所で感染性胃腸炎が疑われる重篤な下痢が発生していると情報提供があった。

感染症を予防するために、大槌高校避難所の衛生環境を以下の項目について点検した。



1) 清掃について

避難所内の清掃は、各班での当番制で毎日行うことになっている。厳密に守られてはいないが、ある程度、掃除は行き届いている。

2) 調理の環境

前述通り、調理場は高校の調理実習室を使用している。

いくつもある流し場のうち、調理専用の流し場が決まっている。

調理者は他の作業を行わない(トイレ掃除や配膳などを担当していない)。

調理者は多くの避難者が暮らす体育館ではなく、調理場に隣接する部屋で生活している。

3) 食事の配膳

配膳も各班の当番制だが、トイレ掃除の班とは分けている。

配膳時はエプロン、手袋を着用し、袖口まで覆い隠すように徹底されている。

○避難所における感染症予防のチェックポイント

1. 避難所内は土足禁止になっているか？

避難所は土足厳禁で、出入口にマットを敷いている。

2. 多人数の収容は避ける

震災当初は900人が避難していたようだが、現在は240人まで減り、背丈ほどのパーテーションやカーテンである程度少人数で仕切られている。

3. 清掃、換気は行われているか

清掃は前述通り。体育館に工業用の空気清浄機を数台設置予定。

4. 食器はしっかり洗浄、または使い捨ての食器か

使い捨てを使用しないときは、調理場で洗浄し、アルミラックで隙間を空けて乾かしている。

5. 調理者の体調管理

調理担当者の人数には余裕がある。休みも取れているようだ。

6. 生活スペースにゴミはないか

大量のごみは屋外の屋根つきのゴミ捨て場に捨ててある。生活している体育館から10mほど離れている。

7. 手洗い、うがい、歯磨き、入浴はできているか

保健師の努力もあり、手洗い場にはハンドソープ、手指消毒薬、使用方法のポップが掲示してある。歯ブラシは余裕をもって在庫しており、前述通り入浴も近くの自衛隊の風呂を利用できる。

8. トイレの利用

トイレ用スリッパ、それ以外の上履きは使い分けてある。

以上の結果より、現時点で早急に改善が必要な状況ではないことが確認された。しかし今後も、気温が上がる避難所の公衆衛生の維持に向けた取り組みが必要となる。また医療チームや保健師チームが撤退した後でも、避難者自身で維持していけるように支援する必要がある。

医療体制の構築に向けた取り組み

震災から2か月がたった今、近隣の医療機関が再開し、徐々に保険診療への歩みを進めている。我々災害医療チームは、避難所内での医療支援は必要最低限にとどめ、従来の医療のスタイルへ戻すためにも避難者を地元医療機関へ送り出すといった支援が必要となる。

5月中旬、避難所に行政職員が入り、保険証の発行手続きを終えたようだった。しかしまだ手元にはない状況で、今の診療では保険証が不要であるにも関わらず、保険証が無いから診察してもらえないと思っている場合がある。

また、義援金の支給がいつになるかわからない不安から、なるべくなら無料の救護所を利用したいなどの声も聞かれた。

更に、地元診療所が再開していることすら知らなかった、どこでやっているのかわからないといった、情報が行き渡っていない状況も見受けられた。

そこで、問診、診察時に出来るだけ救護所外の医療機関を利用するように勧め、保険証がなくても無料で医療が受けられることを説明してもらうように医療チームスタッフ、保健師チームに協力をお願いした。我々薬剤師もできるだけ救護所外処方せんを発行するように医師に協力いただき、患者へもその旨を説明し、地元の保険薬局で処方せん調剤が行わ



れるように努めた。この他、弊社の前任派遣チームが作成してくれた医療機関マップの情報を修正し、自由に持ち帰ってもらえるように小さいサイズに印刷して用意した。

災害医療チーム撤退後も継続して医療を受けてもらえるように、また地元の医療機関が機能できるような流れを作る取り組み、情報提供の必要性を感じた。

セルフメディケーションの支援

大槌町の拠点医療機関となる県立大槌病院の仮設診療所の建設が進んでいる。6月の中旬には開設予定とのこと。多くの避難者がこの仮設診療所の開設を待ちわびていることだろう。

しかし、釜石カンファレンスでの薬剤師の話によると、地元開業医が診療を開始するとたくさんの患者が押し寄せ、本来時間をかけるべき診察や検査が必要な患者まで手が回らないという状況が心配されるようだ。

そこで、医者にかかるまでもない、一般用医薬品（以下OTC）で対応が可能な比較的軽症の患者へのセルフメディケーションの支援が有効であると考えられる。この支援は薬剤師本来の業務の一つであるが、OTCの配置薬箱を「救急箱」として避難所に設置し、効能効果、用法用量がわかりやすいようにリストを作成し、救急箱に貼付した。

各班長を集め、救急箱を設置する目的、まずはOTCで対応して無理な場合は早急に受診が必要であること、本来は専門的な知識がなくても使っていただけるようにつくられたものであることなど説明した。

おわりに

今回JMAT活動に参加する機会を与えていただきました町田社長以下多くの皆さまに心より御礼申し上げます。

大地震、大津波が東日本を襲った3月11日からはや2カ月。復旧から復興へ着実に歩みはじめている被災地、被災者の方々の力強さ。一方では、未だ困難な生活を強いられ、先の見えない不安に襲われる震災当時と変わらない現状に、陰と陽が交錯している印象を受けた。

被災地ではまだまだ支援の手が必要とされています。今も非常にたくさんのスタッ



フが地元の人と一緒に復旧から復興に向け、力を合わせて活動しています。直接的な支援の継続はまだ必要とされていますが、同時に、地域住民、行政をはじめとする様々な機関が主体となって震災前の生活を取り戻すように手助け、後押しするといった支援の形を変えていくことも必要だと感じました。



今回のJMAT活動では医師、看護師、保健師等多くの専門職、支援業務従事者のご協力を得て、被災地での医療活動はもちろん、地域医療体制の構築、避難所の公衆衛生の維持に向け、微力ながら薬剤師としての役割を果たすことが出来たのではないかと思います。また、常に薬剤師としての視点を忘れず、「設営」という

ことを常に意識し、株式会社町田アンド町田商會が目指す薬剤師としての社会貢献が出来たのではないかと思います。

災害医療の現場での薬剤師へのニーズ、発揮すべき職能を再確認することが出来たと同時に、勉強不足が露呈し、十分な対応ができなかった点もありました。より一層の薬剤師としてのスキルを高めることが必要だと感じている次第です。被災した皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、今後も引き続き、様々な分野から出来る限りの支援を続けていく必要性を感じました。

謝辞

今回お世話になった方々へ

藤川医師とチーム藤川の皆様

一週間のJMAT活動お疲れ様でした。チームの皆様の安定感と明るい雰囲気、合流したばかりの我々の緊張がほぐれ、以後の活動が実りあるものになりました。一泊二日の短い期間とは思えないくらい、色濃い思い出が出来ました。ありがとうございました。

角田医師とチーム角田の皆様

むつ市からの支援お疲れ様でした。救護所では様々なことがおきましたが、チーム角田でともに乗り越えたこと、今では大変貴重な経験となりました。医療活動以外にも笑いの絶えない意見交換会、奥様のおいしい手料理、先生から頂いたおいしいお酒、どれをとっても良い思い出です。本当にありがとうございました。

幾田保健師はじめ、愛知県保健師チームの皆様

愛知県からの支援お疲れ様でした。皆様の日常の活動があったからこそ、避難者の生活が健康的に保たれていたと感謝するとともに、保健師さんの活動が住民の健康に寄与しているのだと改めて実感しました。また、様々な情報交換を通して我々の医療活動もスムーズに遂行できたのだと思います。感謝申し上げます。

釜石対策本部 寺田医師、中田薬剤師

釜石、大槌地区の医療のために、毎日寝る間も惜しんでの活動本当にお疲れ様です。避難所でのインフルエンザの対応にご協力いただき、大きな感染拡大もせず、無事終息することが出来ました。ありがとうございます。これからもお体に気をつけて過ごして下さい。

大阪薬剤師会 奥田薬剤師

大阪からの支援お疲れ様でした。奥田さんとはセルフメディケーションの支援から公衆衛生の向上に向け様々な意見交換ができたこと、感謝申し上げます。これからという時に撤退となり、奥田さんとはもう少し一緒に活動したかったです。まだまだ避難所の衛生状態に不安は残りますが、奥田さんの後任チームが必ずや意思を引き継いでくれるはずです。まずはお疲れ様でした。

大槌病院 阿部作業療法士

お忙しいところ、色々なお話を聞かせていただき誠にありがとうございました。この度の頂いた情報は今後のJMAT活動に役立てていきます。一日も早い県立大槌病院の再開を心より祈っております。

町田アンド町田商会 社員の皆様

町田社長をはじめ、皆様のご支援、ご協力のおかげで無事任務を終了することが出来ました。本当にありがとうございました。



今回の活動にご協力いただいた全ての皆様に心より感謝するとともに、厚く御礼申し上げます。

以上